

『官刻孝義録』

—幕府仁政のパフォーマンス—

Niels VAN STEENPAAL

はじめに

徳川中期以降の出版メディアの発展は、必ずしも幕府にとって望ましいこととして歓迎されたわけではありませんでした。書物はそれを読む人に強い影響を与えるものなので、大衆出版は国の安定に直接かかわる課題と捉えられたからです。従って、幕府は世間を走る情報を統制することに務め、出版統制令を出し、出版検閲制度を設置したわけです。しかし、幕府は書物に対して、こういった否定的な態度を示した一方で、「官版」という手段を通じて、積極的に出版と取り組んだことも事実です。官版は特に寛政期において一層頻繁に出されました。これは、幕府の出版の影響力に対する意識と、その影響力を政治上に動員する願望が読みとれる点で、メディア史の視点から見て非常に興味深い展開です。政治がメディアを通じて情報を都合よく操ることは、現代では珍しくはなく、連日のテレビや新聞での報道がその著しい例だと言えます。しかし、寛政期当時においては、このメディアに関する意識は一つの発見といっても過言ではありません。

ところで、幕府が出版メディアを動員した背後にはどのような意図があったのでしょうか。本発表では、寛政期成立の官版の『官刻孝義録』（以降『孝義録』と呼ぶ）での具体例をもって、その意図の在りかを論じたいと思います。先行研究では、『孝義録』は「庶民教化」政策として捉えられてきましたが、私はその意図を「仁政アピール」に求めます。つまり、幕府が『孝義録』の編集出版をもって、幕府政治の徳を世間に宣伝しようとしたということが、本発

表の主張です。

『孝義録』の紹介とその編纂意図の問題所在

『孝義録』はちょうど寛政期にかけて成立しました。寛政元年（1789）の三月に全国孝行奇特者の調査が幕府によって開始され、^①寛政十二年の八月にその編纂が完成し、関係者には褒美が下されました。^②それから、翌享和元年八月に、『孝義録』の刊本が献上され、^③同年十一月にはその公的販売が許可され、その旨が御触書で世間に宣伝されました。^④こういう過程を経て日の目を見た『孝義録』は、五十巻からなる膨大な書物です。その中には、五畿七道順に従って、全国の善行者8611名が所載されています。そして、そのうちもっとも優れたと評価された者の善行が、和文で書かれた伝文755件で詳らかに描かれています。^⑤その伝文は、5050字の長文や196字の短文もありますが、^⑥大体は400字から2000字まで程度のものです。善行は、孝行者・忠義者・忠孝者・貞節者・兄弟睦者・家内睦者・一族睦者・風俗宜者・潔白者・奇特者・農業出精の十一種に分類されています。この『孝義録』に収められている善行者のほとんどが庶民であり、庶民以外は、武士身分の78名と、^⑦穢多・非人身分の15名を数えるのみです。

中国古典の復刻が主である官版の中で、以上の特徴を持つ『孝義録』は異常な存在であることがわかります。従って、当然、幕府が『孝義録』の出版で何を目指したのかという疑問が生じてきます。実は、『孝義録』編纂の動機や意図について直接述べる史料はなかなかみつけれません。管見の限りでは、このことに触れるのは、ただ、『孝義録』の凡例に出てくる次のところだけです。凡例では「此書ハ（略）見る人興起するの心あらハ風化の一助ともなりなんとて、その中に殊に優れたる者ハこれか伝をたて^⑧」たことが述べられています。先行研究は、凡例に従って、『孝義録』の編纂意図を「庶民教化」に求めました。^⑨この通説は決して非合理的なものではないと思いますが、「庶民教化」だけをもって『孝義録』を説明しようとする、いくつかの疑問点が残されます。

この点を整理して概観します。

第一に、先述の通り、『孝義録』は五十巻からなる膨大な書物で、その大きさは、出版上・普及上・使用上等の様々な面から見ると大変不便なものでした。幕府が庶民に対して教えることがあるなら、それには五人組帳・高札・御触書・説教師等の効率的な手段があったはずです。

第二に、その大きさは不便だけでなく、『孝義録』が内容とする簡単な実践道徳を伝えるために、もとより不必要なものです。『孝義録』には、755件の伝文が収められているわけですが、その伝文は文章・内容ともに酷似しているのです。『孝義録』伝文の半分以上が繰り返しに過ぎません。

第三に、大多数の伝文のみならず、『孝義録』中に掲載されている伝文のない事例も、教化上、無用の長物です。この事例には、名前・住所・年齢・善行類等が述べられているだけであって、具体的な言行については語られていません。この伝文のない事例が『孝義録』の三分の一程度を占めており、「庶民教化」というだけでは説明のつかない事実です。

第四に、『孝義録』の法外な値段は一般庶民にはなかなか手が届かないものでした。幕府に出された『孝義録』には、八十五匁の上本と、六十匁の次本との二種の品質のものが有ります^⑩。この事実には二つの点で注目すべきです。まずは、一番安いという六十匁の次本でも、たとえば当時日雇い給料が四匁程度であった庶民大工に手が届くとは考えにくいということ^⑪。そして、そもそも『孝義録』がわざわざ二種類で出版されたのはなぜかということです。庶民教化を目指すならば、その教化内容こそが重要なはずで、そもそも高級な品質を求める必要がありません。

第五に、『孝義録』の成立時期には、すでにたくさんの道徳教訓書が存在していたという事実があります。後で詳しく述べますが、『孝義録』のような、いわゆる「孝子伝」書物類も、すでに出版されているわけです。こういう書物の中に描かれてある道徳は、『孝義録』に出てくる孝行・忠義・貞節等といっ

た儒学的実践道徳と何ら変わるものではありません。幕府が「庶民教化」だけを目指したならば、わざわざ幕府自身が書物を編纂する必要はなかったと思われます。

以上の点を合わせて見ると、もし『孝義録』が、ただ「庶民教化」だけを企図したものならば、幕府のやり方は非常に不器用であったと言わざるを得ません。『孝義録』出版をめぐる幕府の政策は、本書を庶民へ普及させるというよりは、却ってそれを妨げるものでしかありません。しかし、私には幕府がそのような不器用な機関であるとは思えません。たとえば、「庶民教化」政策の代表的な前例である『六諭衍義大意』であれば、以上にのべた疑問点を全てクリアしています。『六諭衍義大意』の「庶民教化」政策としてのアプローチは大変効率的なものです¹²。このような倣うべき前例があった以上、これらの疑問点を、幕府の不手際から生じたものとするべきではありません。

とすると、『孝義録』の背景に「庶民教化」以外の意図を推定すべきでしょう。言い換えれば、「庶民教化」という通説は、『孝義録』の部分的説明には成り得るものの、全体的で十分な説明にはなっておらず、『孝義録』を全面的に把握できるような意図を考察することが求められます。この意図を明らかにするためには、『孝義録』をその歴史的文脈に位置づける必要があります。本発表では、文学史と政治史との二つの文脈を描写することによって、『孝義録』の全面的把握にアプローチしたいと思います。

文学史的文脈―「孝子伝」

『孝義録』の意図を考えるにあたって、まずは同類の書物と比較考察すべきです。同類の書物の編纂意図の検討を通じて、『孝義録』編纂意図への手がかりが得られると考えます。というのも『孝義録』を「孝子伝」の一種として理解すべきと私は思うからです。

「孝子伝」、すなわち善行者（特に孝行者）の言行を物語る伝文は近世に多

く編纂され、伊東多三郎氏によると、その数は百種を上回るものですが、¹³⁾『孝義録』の『孝子伝』としての特徴はその収録事例の豊富さであり、その点で、この百種を全部『孝義録』と同類扱いすることはできません。事例が数多く掲載され、少なくとも二巻以上からなるという条件のもと、『孝義録』と同類なものとして取り上げることが可能ないくつかの「孝子伝」は次の表で示した通りです。

書名	編纂者	初出版年	巻数	事例数
会津孝子伝	森雪翁	1742	5	47
筑前国孝子良民伝	竹田定直	1742	2	38
筑前国孝子良民伝（後編）	竹田定直	1743	3	18
若州良民伝	塩野伯篤	1781	4	54
肥後孝子伝	中村忠亭	1785	3	57
肥後孝子伝（後編）	中村忠亭	1789	3	569
備前国孝子伝	湯浅明善	1789	5	149
備前国孝子伝（後編）	湯浅明善	1792	5	133
筑後民間孝子伝	宮原国綸	1795	2	58
筑後民間孝子伝（後編）	宮原国綸	1797	2	75
筑前国孝子良民伝（続編）	竹田定良	1798	3	70
芸備孝義伝	頼春水・頼杏坪	1801	9	183
阿淡孝子伝	福田愛信	1819	3	55
仙台孝義録	大槻格次	1858	3	598
阿淡孝子伝（後編）	福田愛信	1862	7	106

さて、以上の「孝子伝」自体がその編纂意図としては何を挙げているのかというと、それは大抵、善行者の事績の記録と、その記録の出版による庶民教化です。これだけですと、『孝義録』の「庶民教化」説はまた一層信憑性が増しますが、こういう「孝子伝」それぞれの記述から一步退いて、その文脈を展望す

ると、違う風景が見えてきます。例えば、『若州良民伝』の塩野伯篤の序を見てください。

(略) 吾藩祖空印公、封此州以来、百有餘年、其間亦有孝子淳民。歷々可数焉。而時君褒賞之、賜以錢穀。雖然無記之者、則往々闕亡、不可復得見也。嗚呼、可憾矣哉。今侯及襲封、夙夜好学信道、設饗舍崇教化。其要在明人倫厚風俗也。是以邦内靡然從風、孝子淳民之徒、連年游見。侯殊好其善行、賜錢穀免租稅。視諸前代、其賞異最優矣、然及詳其懿蹟之實、而僅存有司之日曆、或出郡官之割記。在統紀紛々、不能見其委曲也。今茲安永庚子春、執政大夫、議事之餘、深嘆其泯没、遂命余伯篤、委以輯録之事。余固陋疎拙、以不堪其任、固辭而不許。於是歷視史簿、傍諏郡吏、摺摭其遺漏、考索其顛末、幸而得六十餘人、遂記之梗概、題曰若州良民傳。余竊謂如此數十人、則草野之細民、未嘗知学、而能之。此雖天性民彝之所固然、而公者自非有嘉其志旌其行、則何以得旋令名於闔國、而誘後人乎。然則彼亦生吾侯好善而已矣 (略)¹⁴⁾

確かに、以上の文章では、「記録」と「庶民教化」の二つの編纂意図が出てくるわけですが、それより注目していただきたいのは下線を施した箇所です。善行者の頻出とその褒美は直接に君主の徳と結ばれる、と言うのです。善行者の存在・認識・褒美は立派な藩政のお陰だという論理です。『芸備孝義伝』の凡例中の「吾芸備のくに(略)あるひハ己が天性に稟、あるひハ上の教化に生て、もろもろ善行をなす者その数を知らず¹⁵⁾」という記述にもまた同様な論理が動いています。この論理に従えば、善行者の記録は、同時にその君主の徳の記録にもなります。そして、儒学には、徳ある君主、すなわち名君が、民を教化すべきだという思想があります。つまり、「孝子伝」における庶民教化の主張は、同時に君主の道德の主張に繋がるのです。例えば、『阿淡孝子伝』の柴野碧海の序の、教化に関する「是世之仁人君子。所以有孝子傳之編也歟¹⁶⁾」という記述が、まさにその論理です。結局、「記録」と「庶民教化」の二つの編纂意図は、君主の徳の証になるのです。この論理が具体的に明示されなくても、

儒学的な考え方では必ずそのように解釈されるわけです。

しかし、立派な庶民イコール立派な君主という論理が意識されると、逆に「孝子伝」は君主の自慢話に過ぎないという疑いが生じてきます。『若州良民伝』の高資達の序の、「蓋此編也、非曰求譽於大方。唯欲與諸卷中所載之邑之人之子之孫者、以稱其美、使為之榮、其斯已矣¹⁷⁾」という記述からは、その疑いを避けようとする意図が読み取れます。同様の記述は『備前国孝子伝』の湯浅明善の凡例にも見られます。

(略) 素より予つれづれのすさミにもあらず又其事状の詳ならざるをいたずらに加へぬるも意なきに非ず、其令名美德を周く世に顕して不朽につたへ、風教の万一も助んと思へば也、元來吾藩の名譽を他邦に求るにもあらず、此等の子孫この書を読んで其父母のいさほしを追慕して此後孝子良民の多く興起せん事を深く希ハなり (略)¹⁸⁾

あるいは、『肥後孝子伝』の藪懿の序には、

公襲封之初。首建學校。以施孝弟之教。而一邦之民。雍如也。既賞其尤孝弟者。歲挽十餘人。積至數百人。史臣請采錄。以傳四方。公曰傳之四方人。將曰寡人德教之所致。寡人實不德。而獲斯美譽。此累寡人之過也。事乃寢。處士中村子曰。我野人也。國無野史之禁。我唯恐孝子之湮沒莫聞也。乃錄述成卷。(略) 懿曰善哉。國史之不錄。以成公之謙也。處士之傳也。以顯孝子之美也 (略)¹⁹⁾

以上の例に見られる、自慢話としての「孝子伝」の否定こそが、逆に世間にそのような解釈が存在したことを物語ります。或いは、実は編纂・筆者たちの中に君主の徳の誇示という意図があったからこそ、彼らをこの疑いに敏感にさせたとも考えられます。いずれにせよ、「孝子伝」は、藩主とその藩政の徳を間接的に物語るものだと言えます。しかも、興味深いことに、「孝子伝」と藩の関係は間接的なものだけで終わりません。たとえば、先の『肥後孝子伝』の序に、藩と「孝子伝」制作の関係を完全に否定する発言さえあったにもかかわらず、実際には山内由紀氏が明らかにしたように、その制作においては藩校が

主役とも言うべき主導的役割を果たしていました。²⁰ これは前述の論理からすると、当然の事実であり、逆に、藩の誇りと密接な関係にある「孝子伝」に、藩が関わらないということは有り得ないと言うべきでしょう。

藩が「孝子伝」制作に参加した証左として、それぞれの「孝子伝」の著・序・跋のいずれかに当藩の藩校の教授が直接関わったという事実が挙げられます。『若州良民伝』の跋は、当時若狭国小浜藩校「順造館」の教授を努めた西依景翼によって執筆されました。『肥後孝子伝』両編の序は、当時肥後国熊本藩校「時習館」祭主の藪懿が書いたものです。『備前国孝子伝』の序を書いた小原正路も教授として備前国岡山藩校の「閑谷学問所」につとめた人物です。『筑後民間孝子伝』両編に当時久留米藩校「明善堂」教授の樺島石梁が序を加えました。『芸備孝義伝』は当時広島藩に設けられた学問所の教授を務めた頼春水（とその弟杏坪）の編集物です。『阿淡孝子伝』の序は、徳島藩の「寺島学問所」教授の柴野碧海の筆によるもので、同書の後編の序は同所教授的那波希顔が勤めました。『仙台孝義録』は、仙台藩校「養賢堂」教授の大槻格次が著したものです。

このような藩校教授との関係が確認できない「孝子伝」としては、たとえば『会津孝子伝』や『筑前国孝子良民伝』とその後編がありますが、『会津孝子伝』が制作された時期には、会津藩にはまだ藩校が設けられなかったので、序を加えられる藩校教授も勿論いませんでした。同様に、『筑前国孝子良民伝』とその後編の刊行時期に福岡藩にはまだ藩校ができていないので、藩校教授の序も当然に見つけられませんが、藩校の「修猷館」が天明四年にできてから制作された『筑前国孝子良民伝』の続編には、その藩校教授の竹田定良の序がついています。つまり、私が調べてきた「孝子伝」には例外なく、可能な限りにおいて当藩校教授が関わっていたのです。²¹ そこから「孝子伝」制作の背景にも藩と藩校の存在があったことが推察できますが、事実としては、藩命をもって制作されたことが明記されているのは、私が検討した「孝子伝」の半分程度でした。²² とはいえ、「孝子伝」という書物は藩の協力なしでは、なかなか成し遂げられ

ないものだと思います。褒賞の記録取調や情報編纂や出版の費用等の様々な資料・時間・金銭といった負担を、個人の力で負うのはほぼ不可能でしょう。

藩がどこまで具体的に「孝子伝」制作に携わったかという問題はさておき、藩校教授が序・跋を加える事態は意味深いことです。これは「公」の印が押されたことを意味します。藩校教授の序を通じて、その書物と藩の関係が公式に成り立つという意味で、これは政治行為に他なりません。

しかし、ここで一つの疑問が生じます。このような藩の「公」の印がなくても、内容自体が藩の誇りを世に伝えていく性質のものであるのに、なぜ、藩校教授の序・跋を通じて「孝子伝」を公式に認めるという政治行為が行われたのでしょうか。それは、藩校との結びつきによって、儒学的な権威付けと、「庶民教化」という主張がさらに強調されるからでしょう。しかも、「孝子伝」は他藩の「孝子伝」とその中で示唆されている他藩の仁政・名君像を意識して、反応・競争的に編集されたからだとも思われます。たとえば、『若州良民伝』の塩野伯篤の序には、「堀伊葛子有本朝孝子傳之作。継奥之會津筑前土佐等諸州、亦有孝子良民之傳、梓行于世²³」と述べられて、すでに諸藩で出版された孝子伝が意識されたことは明らかです。そこでは、ただ「孝子伝」の存在に止まらず、その内容に至るまで意識されました。特に、藤井懶斎著の『本朝孝子伝』が、その意識の対象になりました。たとえば『会津孝子伝』の森雪翁の叙からも次のように窺い知れます。

過し比京洛藤井懶斎翁の編集せられし本朝孝子傳を見侍りしに（略）繰返しぬる内列國に勝れ備の前列州に孝子多きは其國君善を好み玉ふ故なりと見えたり爰に於て暫く書を措き歎じて思ひらく往昔は不知寛永二十年土津靈神會津を知し召し給ひてより以來孝子善人を揚げ玉ひ難有御政道にて目のあたり賜のもの黎首數多侍れは藤井氏傳ひて彼傳記に載せ加ひ度事を去れと都鄙の境ひ遼かに遠く隔りたり且吾儕老ひて病める上道に志薄ふして荒増のみに年月を送りぬ（略）²⁴

森雪翁が、『本朝孝子伝』に会津藩の善行者が所載されていないことに不満

を抱いていることは明らかです。世に広く普及された『本朝孝子伝』から無視されていることに不満を抱いた森雪翁（あるいは会津藩でしょうか）が、藩の名誉を回復するために『会津孝子伝』を編纂出版したことがうかがえます。さらに、『会津孝子伝』の斎希賢の序の「會津孝子傳は（略）一百八十人に余れり其盛ん成る事列國の未だ不聞所なり²⁵」という記述からも、やはり早い段階から、「孝子伝」の執筆に、他国との競争意識が伴っていたことがわかります。他の地域でも、たとえば備前の善行者は『本朝孝子伝』に多く所載されていますが、それでも『備前国孝子伝』後編の荏土井潜の序に、同様の記述が確認できます。

（略）昔年西京藤井季廉。撰孝子伝。載教州人。而黄薇過半云。我烈公之君於黄薇。称政天下第一。、以孝弟誘導国人。其化之所致則然也。不独出其至性。可以徵焉。湯君子誠。余累世通家。其父其祖。或以修良著。或以博雅名。黄薇一方之孝子。季廉之書所不載。子誠恐其湮滅不聞於後也。

（略）孝行之衆多。他邦少比矣（略）²⁶

また、『本朝孝子伝』の初版本に、筑前国の善行褒賞政策に対する批判の言葉があることから、『筑前国孝子良民伝』も、『本朝孝子伝』に刺激を受けて制作されたと推定できます²⁷。さらに、次の例も「孝子伝」意識を深く物語るでしょう。湯浅明善が天明六年に執筆した『備前国孝子伝』の凡例にはこのような記述があります。

其令名美德を周く世に顕して不朽につたへ、風教の万一も助んと思へバ也（略）されとも我才短く筆拙なれば其孝子忠臣の事状を著すにたらず又読人をして感発興起せしめ、世の児童の助にも能ハしと特に愧懼る、而已²⁸

この文章を前年の天明五年に出版された『肥後孝子伝』の中村正尊の序と比べてみましょう。

其令名美德を周く民に顕はして永く世に傳え、且風教の萬一を助んことを欲し（略）素より才短く筆拙ければ、孝子忠臣の情状を著すに足らず又讀

人をして感發興起せしむる事能はじ、特に愧懼るゝのみ²⁹

記述の重複から、湯浅がその凡例を書くに当って、『肥後孝子伝』を参照したことが一目瞭然です。無論、中村と湯浅の両者が依った第三の「孝子伝」がどこかに存在する可能性はありますが、そうだとすると、「孝子伝」制作にあたって、他の「孝子伝」が意識されたという結論には変わりはありません。

以上、三つの事が明らかになりました。第一に、「孝子伝」は藩の誇りに関わる書物であること。第二に、「孝子伝」制作は藩校と関わりを持つこと。第三に、「孝子伝」制作にあたって、他の「孝子伝」が意識されたこと。この点を踏まえて、私は次のように考えます。

『本朝孝子伝』を筆頭に、「孝子」顕彰は「孝子伝」の形で、世間に広がっていきます。同時に、それを厚く褒賞するか否かを通じて、君主への評価も世に流布されていきます。世間の評価を気にする、名君のイメージを掲げたい藩主は、自分の「仁政」を世に知らせるために、「孝子伝」制作を儒学的学問と教化の象徴である藩校に命じたのです。

これは、「孝子伝」を「仁政アピール」として捉える解釈です。もちろん、以上の解釈は推測の域を出ませんが、この発表で『孝義録』の文学史的文脈として強調したいのは、結局それぞれの「孝子伝」の編纂意図にかかわらず、「孝子伝」には「仁政アピール」の側面が不可離についてまわるということです。

政治的文脈—寛政改革

田沼時代におけるさまざまな社会問題を経て、天明末期の幕府が直面した一つの大問題は、世間の政治に対する不信感でした。従って、寛政改革は一つの「公儀権威の回復³⁰」の試みでもありました。このためには、幕府にとって、経済的政策以外にも、二つの方針が必要だったと思われます。まずは、日本の幕府支配下の政治・イデオロギー的な統一、そしてその支配の正当性の主張で

す。

幕府がこの方針を推し進めるに当たって、メディアを非常によく使いこなしたことは注目に値します。タイモン・スクリーチ氏はそのことを「アート」メディアの視点から詳細に述べましたが、³¹幕府は「出版」メディアの影響力も深く意識し、その力を巧みに政治上に利用しました。例えば、松平定信は天明七年に自分の救恤活動を物語る読売を作成させ、刊行させたと思われ、³²また、高澤憲治氏が指摘したように「従来白河藩政に関しては、定信の自伝である『宇下人言』や、彼の顕彰を目的とした藩士の手になる書物が多用され、「明君」ぶりの主要な根拠となってきた³³」ました。さらに幕府は天明末期の田沼政権追罰の時期には、田沼政治を批判した黄表紙の刊行を黙認したその一方で、寛政期に反松平政権政策の黄表紙が出てくると、出版統制に着手するといった政策を実行しました。³⁴

以上のことは、全て松平政権がメディアを利用して自分の正当性を主張したものとしてみてもよいでしょう。思うに、このエピソードの注目すべき点は、具体的政策という面の他に、宣伝的政策或は情報操作の面も政治の上で重要であるとの意識が、松平政権に備わったことです。つまり、政治武器としてのメディアに対する意識です。この意識は現代政府にとっては常識ですが、当時においては一つの発見だったといえましょう。たとえば、近世史上における法令印刷の最初の事例も寛政期のものでした。寛政三年、幕府は江戸の庶民に「町法被仰渡書」を出版させ、それを全家に有償配布させました。³⁵そして、その翌寛政四年、定信は御触書の調査を命じて、それらを編纂して全国の大名に配布する計画も立てたのです。³⁶結局計画は中止されましたが、この計画自体、定信のメディア意識が反映されている点で意味が大きいものです。そして、全国大名を対象にしたことにも、また幕府支配下の統一という方針が伺えます。『国鑑』『藩翰譜続編』『寛政重修諸家譜』等の寛政期に幕府が始めた編纂物も、出版メディアによつての「統一」や「正当性」への主張として見る事が出来ます。このような幕府編纂物について白井哲哉氏は、「これらは綱紀肅正を契機とし

て始まった幕府の編纂物が、林家の下で「歴史意識の操作によるイデオロギー統制」の傾向を強める過程と評価できよう³⁷⁾と述べて、統一という方針の存在を指摘しています。また深谷克己氏は、こういう林家の「歴史工作」を、「大きな文脈でとらえれば、諸藩大名の名君創造に対抗する、幕府の不安感の反映としての將軍名君化の政治的文化的努力³⁸⁾」として解釈して、正当性の主張を読み取っています。

以上、短い検討でしたが、この発表で強調したいことは、すなわち寛政期の「公儀權威の回復」という重大な問題と、幕府のその克服のために、積極的なメディア利用を通じての「統一」への意欲とその「正当性」の主張を必要としたということです。

『孝義録』の編纂意図

話は『孝義録』に戻ります。前章で述べてきた文学史・政治史的な文脈に基づいて、『孝義録』の編纂意図を考えてみます。まず注目すべきは、孝行奇特者の調査開始が寛政改革の早い時期に命じられた点です。竹内誠氏によると、松平政権が成立し、その権力基盤が確立するのは、寛政元年の春です³⁹⁾つまり、政権が確立した直後、寛政元年の三月に、幕府が孝行奇特者の調査に踏み出したことになります。これは、このプロジェクトが明らかに幕府にとって重大な意味を持っていたことを意味します。当時の幕府の「公儀權威の回復」という課題の文脈の中で、すなわち「統一」と「正当性」の問題として捉えるべきでしょう。この調査は全国の協力、いやそれ以上に服従、を前提としたものであり、そこから「統一」への強い意志を読み取ることができます⁴⁰⁾。また、それ以前の二年間、田沼旧政権を「悪」に染めるための宣伝的政策を行ってきた松平新政権が、突然「善」の調査を行ったことは、新政権による「正当性」のアピールを意味します。このように、私は幕府の孝行奇特者調査をただの情報収集手段の他に、「統一」と「正当性」を強調した宣伝的政策として捉えています。

善行調査の意図はともかくして、『孝義録』の編纂意図は一体どうでしょう

か。『孝義録』は享和元年に出版されたとはいえ、伝文の作成は、大田南畝によって寛政四年に始められたと思われる^⑪、遅くともこの時期には、孝行奇特者調査データを「孝子伝」の形で仕上げて、世に出すことが計画されたと考えられます。さらに言えば、直接的な証拠はありませんが、松平定信の書庫に寛政元年ごろに刊行された「孝子伝」がいくつかあったこと^⑫、彼が天明八年に『備前国孝子伝』に興味を示したこと^⑬からすれば、松平定信が孝行奇特者の調査を命じた時点で、すでに「孝子伝」の出版が構想されていたと思われます。しかも、調査開始以前に『会津孝子伝』『筑前孝子良民伝』『若州良民伝』『肥後孝子伝』『肥後孝子伝後編』といった藩規模の「孝子伝」はすでに、三都で出版されて、書肆に並んで、それぞれの藩の仁政ぶりが民の目に留まっている状況でした。深谷氏も指摘したように、仁政・名君アピールはもとより「単に領主階級の内部の競争ではなく、天下の民に対して、どちらがより偉大な名君であるかを競おうとするもの^⑭」であったので、名君像に憧れ、同時に田沼政権を背景に世間評価に敏感であった松平定信が、書肆に並ぶ「孝子伝」の「仁政アピール」の側面を意識し、それに刺激され、調査データの「孝子伝」としての出版を企画したことは容易に想像されます。

結局、どの時点で幕府が『孝義録』の出版を決めたとしても、出版したのは事実です。そして、出版された『孝義録』の形は、幕府がその出版で何を指したかへの手がかりになると考えられます。ここで、前章で述べた「庶民教化」説への疑問点が想起されます。これらの疑問点は、「仁政アピール」説を採ることで説明がつくのです。

幕府が目指したのは、安く便利で庶民がだれでも簡単に手に入って、広く普及され、広く読まれる書物ではなかったのだと私は思います。その目的は、何かを教えるのではなく、何かを示すことにあったと考えられます。庶民に善を涵養するのではなく、世間へ対して幕府が善であることを宣伝することに幕府の意図はあったのではないのでしょうか。この意味で、『孝義録』という書物は、豪華な仁政パフォーマンスとも呼べるものでした。幕府は、それぞれの藩政が

自慢した善行者を集めて、それを「官版」というメディアを通じて、幕府傘下に統合することによって、天下統一を強調し、そのなかにただ一つの仁政、すなわち幕府仁政を残したのです。「統一」と「正当性」の両方の意図がそろって、『孝義録』に潜んでいるわけです。

こういう意図で制作されたと考えると、『孝義録』の五十巻の大きさの持つ意味がわかってきます。天下第一仁政アピールの主張が成り立つためには、『孝義録』は既刊の「孝子伝」より多くの人数が所載されなければなりません。そして伝文がない事例も、教化上には役立たなくても、「仁政アピール」の観点からすれば、多ければ多いほど、幕政の善の裏付けになってくれます。後は、『孝義録』の値段高い上本も、「仁政アピール」解釈で理解できます。それは購入されなくても、豪華な品質の良い、五十巻の『孝義録』が書肆の本棚に置かれるだけで、それを見る人に幕府の善たる權威が伝わってきます。『孝義録』の出版と販売は御触書で宣伝されたので、本物が見られなかった人にも、幕府の仁政ぶりは広まっています。『孝義録』と同じく、実践道徳を説く書物は当時すでにあったわけですが、それらの書物は幕府「仁政アピール」の面が欠けていたため、「官版」として採用されなかったでしょう。つまり『孝義録』は、具体的内容より、その全般的印象、或いはそのメディア自体が重視されたのです。このメディアに対する深い意識が、『孝義録』で一番注目すべき歴史的意義だと思います。

私は『孝義録』を政治的なメディア戦略として考えています。寛政期に幕府が出版メディアの力を明確に認知して、それをどのように政治の場で活かせるかという問題関心の上で出版されたのが『孝義録』なのです。『孝義録』の凡例の「風化の一助」という記述は、以前に出版された「孝子伝」に学んだ決まりセリフに過ぎないと思われます。「庶民教化」は名君に期待されるもので、それを主張することによって、逆に本来の意図、すなわち「仁政アピール」に結びつきます。幕府は『孝義録』の出版で「庶民教化」を目指したのだとし

ても、「教化」のための効率性を、この仁政パフォーマンスのために犠牲にしたのだと結論付けることができると思います。

おわりに

今回の発表は研究途中のもので、不備未熟の点が多々ありますが、少なくとも「孝子伝」が、社会的・政治的現象として研究する価値あるものであることが明らかになったと思います。今後の課題として、それぞれの「孝子伝」に徹底した書誌学・歴史学的な考察を加え、「孝子伝」が近世時代において、いったいどういう役割を果たしたかを詳しく検討することが挙げられます。また、メディアの視点から、幕藩が世間評価を操作するために、「孝子伝」以外にどのようにメディアを利用したか、そしてそれにあたって仁政の主張がいかほど、どういう形で現れたか、そして藩校がその政策にいかに関わったか、など、さまざまな興味深い問題が提起されます。

〔注〕

- ①「文恭院殿御実紀」巻6（黒板勝美『新訂増補国史大系』第48巻、91－92頁。）
- ②「文恭院殿御実紀」巻29（『新訂増補国史大系』巻48巻、442頁。）
- ③橋本昭彦編『昌平坂学問所日記』第1巻（東京・斯文会、1998）49頁。
- ④高柳真三・石井雄二郎編『御触書天保集成下』（東京・岩波書店、1941）6423号、811頁。
- ⑤対象とする版や数え方等によって誤差は生じるが、この発表では詳細は割愛する。『孝義録』編纂者の一人の大田南畝は、「惣人数八千六百十一人」「立伝 七百六十二篇 人数九百八人」としている（『孝義録編集御用簿』濱田義一郎編『大田南畝全集』第17巻（東京・岩波書店、1988）195頁）。
- ⑥「正助」の伝文が一番長く、「せん」と「与次右衛門」の伝文が一番短い。（菅野則子校訂『官刻孝義録』（東京・東京堂出版、1999）1150、547、510頁。）
- ⑦伊東多三郎氏の「第一表」から計算した人数である（『近世道德史の一考察』『近世史の研究』第3巻（東京・吉川弘文館、1983）256－271頁）。ところで、『大漢和辞典』は、『孝義録』を誤って「士の列傳」としている（諸橋轍次『大漢和辞典』第3巻（東京・大修館書店、1956）6952：49号、827頁）。
- ⑧『官刻孝義録』3頁。
- ⑨池上彰彦「後期江戸下層町人の生活」西山松之介編『江戸町人の研究』第2巻（東京・吉川弘文館、1973）143頁；山下武『江戸時代庶民教化政策の研究』（東京・校倉書房、1969）324頁；伊東多三

- 郎「近世道德史の一考察」252頁；鈴木理恵「江戸時代の民衆教化—『官刻孝義録』による孝行の状況分析」『長崎大学教育学部社会科学論叢』第65号、2004年、33頁；『官刻孝義録』下巻、503頁；妻鹿淳子『『官刻孝義録』の編纂と岡山藩』『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第18号、2004、52頁。等。
- ⑩高柳真三・石井雄二郎編『御書天保集成』下巻（東京・岩波書店、1941）6423号、811頁。
- ⑪小野武雄『江戸物価事典』（東京・展望社、1979）212頁。
- ⑫『六論衍義大意』での庶民教化の例で注目すべき点は、先ずは頻繁かつ大量に無料で配布されたことである。また、その配布先が手習塾師匠だったことである。つまり、教育現場を通じて庶民教化をはかろうとしていたわけである。
- ⑬「近世道德史の一考察」250頁。しかし、「孝子伝」の定義をめぐる問題もあるが、その考察は別の機会へ譲る。
- ⑭山本編集室編『若州良民伝』（小浜・若狭路文化研究会・げんでんふれあい福井財団、2004）22－23頁。
- ⑮鈴木幸夫編『芸備孝義伝 初編』（広島・安田女子大学言語文化研所、2007）7頁。
- ⑯原文は、「近代デジタルライブラリー」（www.kindai.ndl.go.jp）に収められている、明治十四年版行の『阿淡孝子伝』である。
- ⑰『若州良民伝』18頁。
- ⑱菅野則子編『備前国孝子伝』（東京・吉川弘文館、2004）4頁。
- ⑲古城貞吉編「肥後孝子伝前編」『肥後文献叢書』第4巻（東京・隆文館、1910）3頁。
- ⑳山内由紀「熊本藩における孝子伝編纂—『肥後孝子伝』を中心に」『熊本史学』第82号、2003、28－74頁。
- ㉑『備前国孝子伝』の後編の序を書いた荏土井潜がどのような人物なのかは未確認であるが、「黄薇儒学」と自称したところから、藩校との関係が想像される。
- ㉒『若州良民伝』・『芸備孝義伝』・『筑前国孝子良民伝続編』・『仙台孝義録』。
- ㉓『若州良民伝』22頁。『肥後孝子伝』後編にもみられる。
- ㉔釘元衛雄編「会津孝子伝」『岩磐史料叢書』中巻（福島・岩磐史料刊行会、1917）3－4頁。
- ㉕「会津孝子伝」1頁。
- ㉖『備前国孝子伝』175頁。
- ㉗秀村選三編『福岡県史』通史編・福岡藩 文化（下）（福岡・福岡県、1994）222頁。
- ㉘『備前国孝子伝』5頁。
- ㉙「肥後孝子伝前編」4頁。
- ㉚竹内誠「寛政改革」朝尾直弘編『岩波講座日本歴史』第12号、近世4（東京・岩波書店、1976）5頁。
- ㉛タイモン・スクリーチ（高山宏訳）『定信お見通し—寛政視覚改革の治世学』（東京・青土社、2003）。
- ㉜今田洋三「江戸の災害情報」西山松之助編『江戸町人の研究』第5巻（東京・吉川弘文館、1978）240頁。
- ㉝高澤憲治『松平定信政権と寛政改革』（大阪・清文堂出版、2008）357頁。
- ㉞『松平定信政権と寛政改革』112、141頁。
- ㉟山本英二『慶安御触書成立試論』（東京・日本エディタースクール出版部、1999）226－232頁。
- ㊱『松平定信政権と寛政改革』413－414頁。

- ③⑦ 白井哲哉「寛政～文化期の書物編纂と江戸幕府」『日本近世地誌編纂史研究』（京都・思文閣出版、2004）115頁。
- ③⑧ 深谷克己「名君とはなにか」『歴史評論』第581号、1998、13頁。
- ③⑨ 『松平定信政権と寛政改革』112頁。
- ④⑩ 奇特孝行者調査の「統一」としての意義に関する指摘は、「寛政改革」42頁；『江戸時代庶民教化政策の研究』131頁にも見られる。
- ④⑪ この年、大田南畝は「孝必録」という書物の編纂に命じられた。（大田南畝「半日閑話」濱田義一郎編『大田南畝全集』第11巻（東京・岩波書店、1988）326頁。）「孝必録」は『孝義録』と同書であろう。『大田南畝全集』第18巻、687頁も参照。
- ④⑫ 『孝子留松伝』（天明四年刊）『孝子万吉小伝』（寛政元年刊の『孝子万吉伝』であろうか。）『石森孝女伝』（寛政元年刊）。（朝倉治彦編「浴恩園文庫書籍目録 上」『松平定信蔵書目録』第2巻（東京・ゆまに書房、2005）157、163頁。）
- ④⑬ 『近世家族と女性—善事褒賞の研究—』69頁。
- ④⑭ 「名君とはなにか」13頁。

* 討議要旨

相田満氏は、善行者の褒賞はかつての律令体制を武家政権が意識したものではないか、また「節婦伝」との関連性はあるのか、と訊ね、発表者は、近世期に行われた善行褒賞自体、およびその意図や制度化の解明はまだ更なる研究を待つ興味深い課題である。「孝子伝」と「節婦伝」との関連性に関しては、同じ社会現象として捉えている。また、「孝子伝」と呼ばれても、その内容はいわゆる「節婦」のことを物語るという、当時の善行品目の用語の柔軟性のこともあるので、基本的に別のものとは考えていない、と答えた。

鈴木淳氏は、『官刻孝義録』が和文で書かれた理由は、庶民教化を意図した幕府の取り組みであったと考えるべきではないか、と意見を述べた。それに対して発表者は、幕府の仁政を伝えるのは、『孝義録』の内容だけでなく、『孝義録』が和文で書かれていた以上、その書物自体が幕府仁政の庶民教化ぶりの証として意図されたと考える、と答えた。